平成２７年１１月３０日(月)

老球の細道１８３

ＮＢＡ選手にも医師にもなれる

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

スペイン出身でＮＢＡシカゴ・ブルズのセンター、パウ・ガソールを知っているだろうか。２１４センチのビックセンターであるがインサイドもアウトサイドも何でもこなせるオールラウンドプレーヤーである。弟でＮＢＡメンフィス・グリズリーズのマルク・ガソールも兄同様の身長がある。親もどれだけ大きいか興味がそそられる。

彼のプレーは非常にクレバーな面が多くて感心している。彼はバスケットボール選手にならなければ医師になっていたそうだ。両親も医師なので当然かもしれない。ところが、あまりにも大きな身長で器用な動きができたためにバスケットボール選手としても大成してしまった。今のところバスケットボールに専念し、引退した後は医師として働くことを夢見ているという。それにしても２メートルを超える医師に診察してもらったら、威圧感で血圧は上がってしまうだろう。

今は昔、朝日新聞にノンフィクション作家・長田渚左さんの『脳の可能性に懸ける』というコラムが載っていた。『スポーツのできる子は勉強もできる』（幻冬舎新書）という彼女の著書の中でも力説している文武両道への警鐘である。骨子を紹介したい。

【競泳のジョニー・トンプソンは、五輪に４回出場し、リレー種目で米国女子最多の金メダル８個を獲得する一方で、コロンビア大学医学部に通い、麻酔医となった。また、スピードスケートのエリック・ハイデン選手は１９８０年のレークプラッシド五輪で５００メートルから１万メートルまでの５種目すべて金メダルを獲得。その後スタンフォード大学医学部に学び、現在は名高い整形外科医になっているという。

彼らのような凄い才能を持つ人間は特別な天才だと思われがちであるが、アメリカのハーバード大学からは２００人以上の五輪選手が輩出され、メダリストも多数いる一方で、日本では東大卒のトップアスリートは極めて珍しい。この違いは何か？

欧米は勉強して試験をして単位を取らないと、どんな有名な選手でも試合に出られなくなってしまうので学問を修めることへの敬意が深い。日本のようにスポーツに精を出していれば勉強は二の次でもＯＫという考えはない。脳の働きから見ると、九九や漢字を覚えるのもシュートがうまくなるのも同じ。どちらも脳の中の神経回路に信号の通る道筋ができることで身につく。要は根気よく続けること。勉強と運動を分けて考えるのは間違い。

だから欧米では、もし五輪選手になっても、世界を相手に闘い抜いたのだから、その経験を生かし､医師や弁護士くらいにはなれるかもと自分への新たな期待を膨らませてゆく。それに対して日本人は難関大学に入った時点や五輪選手になったところで満足してしまい、勝手に自分の伸びを止めてしまう。

脳にはクセがある。勉強は得意だけど運動はダメだ、と決めつけるのもその逆を信じるのも自分の脳である。また、勝手に可能性を閉じてしまうのも脳なのだ。大切なことは、常に小さな満足を脳に与えて活動を停止させない。自分に常に刺激を与える続けることで「まだ変化する。もっともっと成長できる」と自分自身を鍛えていけば、「メダリストになれる。医師にも弁護士にもなれる」と思える脳をそだてられるのではないか】

すべては脳しだい。その大事な脳に「ノー！」を突きつけてはいつまでも変われない。